



発行日 = 2002年7月1日 発行人 = 面出薫 編集 = 田沼彩子・早川亜紀
照明探偵団・事務局 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-28-10 ライティングプランナーズアソシエーツ内 (田沼彩子)
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023 e-mail = tanteidan@lighting.co.jp http://www.lighting.co.jp/tanteidan/

照明探偵団通信

vol.13 Shomei Tanteidan Tsu-shin

海外調査レポート

～ベルリンカフェ事情～

海外展示会レポート

～フランクフルトメッセ～

面出の探偵ノート

探偵団倶楽部新規会員募集・継続手続き

“Eyes in TOKYO”

～外国人のみるショッピングエリア～

照明探偵団倶楽部活動 1

街歩き報告 (お台場・日本科学未来館)

照明探偵団倶楽部活動 2

研究会サロン報告

照明探偵団日記



ベルリン・ポツダム広場

ベルリン・カフェ事情

Berlin, Germany 2002/04/17-20

今回訪れたベルリンは、統一ドイツの首都として進化をし続ける、ヨーロッパの中で今最も注目される街のひとつ。1989年のベルリンの壁崩壊後、急速に新しい建築も増えていて、街中どこを歩いてもタワークレーンが見えるといった様子。ポツダム広場・再開発地区の建築群も見ずには帰れないけれど、ベルリンならではのあかりはどこにある？ベルリンっ子はどこにいる？というところで、旧東ベルリン中心部・ミッテのまわりを街歩きしながらのぞいて来たカフェについて、ご報告します。

●ベルリンカフェ事情

ポツダム広場周辺にも観光客向けのカフェはたくさんありますが、地元の人たちが集っているのは旧東ベルリンの中心部。まだ肌寒さの残る4月のベルリンだったけれど、少しでも天気の良い日には長い冬の間ずっと待ち侘びた太陽を楽しむように、人々はオープンエアのカフェで時間を過ごしている様子でした。



歩道幅の広い大通りに面したオープンエアのカフェ

最初に足を踏み入れたのは、イタリア人の経営するカフェ。やはりイタリア人のコーヒーはどこで飲んでもおいしい。座る場所は奥にもたくさんあるはずなのに、席は通りに面した窓際から徐々に埋まっていきます。夕暮れにはまだ少し時間のある午後のゆっくりした時間を楽しむ人たち。窓際の席に差し込むどんよりした柔らかな光は室内にあるのにオープンエアのカフェと同じ印象を与えていて、居心地のよい半屋外？半室内？どちらとも言えない空間を構成しています。店のあかりはまだ点いていません。



窓際の席から埋まっていく

ミッテの中心、フリードリヒ・シュトラーク高架下の骨董屋の建ち並ぶ通路の一角に面白いカフェを見つけました。

ドーム状の天井には一面にアンティークの看板が埋め込まれていて、美しいアールを描いています。クラシカルなペンダントやステージライトが空間のアクセントとなり、まるでタイムスリップしたかのような黄金の空間にしばし酔いしれてしまいました。カフェだけれど骨董ストリートの通路でもあるので、お茶をしていると横を人が通ります。それがとても不思議な印象。ガラスを通して差し込む曇り空の青白い光と金色のドームから構成される場所。このコントラストが何とも言えない安堵感と心地よさなのです。いつまでも飽きることなく長居したいカフェに仕上がっています。



骨董屋街の通路の途中になんとカフェが・・・

●夜カフェの魅力

夜カフェの魅力も大人文化の成熟しているヨーロッパならではの。きっと東京では見られない夜の世界がそこには広がっているのでは？！、と私たちは某雑誌の一枚の写真にまんまと誘惑されて、とあるカフェにやってきました。人がシルエットとなって闇に浮かび上がる何やら怪しげな雰囲気。うーん、これは行ってみたい！しかし、一歩足を踏み込んで拍子抜けしてしまいました。写真で見たような闇と人間



高架下のクラシカルなカフェ

が渾然一体となった暗く怪しげな雰囲気は一切無く、健全なにぎわい、ざわめきがそこには存在していました。

自分の好きなようにテーブルを組み合わせて席に座り、自分たちの時間をみんなが楽しんでいる様子。写真にすっかり騙されてこのカフェにやって来た訳ですが、裏切られたという気はしませんでした。

なぜならそこには確かに人が主役の心地よい夜の空間が広がっていたので。

この店の自慢はオーナーのコレクションだと言うペンダントライト。フォルムもひとつひとつが特徴的で、全く統一感など出なさそうなものなのに、あたたかな白熱の調光されたあかりがこの店に見事にマッチ。店内の喧騒と相まって夜カフェの魅力を引き立てています。



夜カフェに誘われて街へ出る



あたたかなペンダントが店内を照らす

●それでは TOKYO はどうだろう？

こうしてベルリンのカフェをすっかり堪能して、目が肥えてしまった私たちは、東京に帰ってきて街歩きをしながらやはりカフェに入ってみました。

東京にだって今やヨーロッパの香りが漂うカフェはいくらでもあります。でも本場のそれとはやっぱり違うんだよな～。人が違う、そこで話されている言葉が違う、目の前に広がる街が違うのだから当たり前のことかもしれません。でも本当にそれだけなのか？

東京のカフェに入ってまず最初に気付いたのは、そこがほぼ完全に20代から30代の限られた年齢層に独占されたいわゆる“オシャレ”な場所になっているということ。新聞を読んでいるおじさんや散歩途中の地元のおばあさんなどはいるはずもなく、オープンカフェの窓際の席にはかなり気合いの入った服装をしてバッチリお化粧をしたお姉さん達が並んでいる。

東京のカフェは競って気合を入れて出かけていく場所であり、こじやれたカフェでお茶をすることが一種のステータスにさえな

りつつあるように思いました。

そういうカフェではスノッパな雰囲気のあるような柔らかな間接照明が結構見られます。

日本のカフェは生活に根付いたみんなのための場所というよりも、限られた世代のライフスタイルを投影した空間になっているように感じます。ヨーロッパのカフェの役割を果たしている場所を日本で探すとなると、それはファミレスか居酒屋か。

もちろん最近のカフェブームに乗って、東京でもいろいろなタイプのカフェが登場してきました。例えば自分の家でくつろいでいるような印象の、座り心地の良いソファを無造作に並べたカフェ。本が自由に読めるように置いてあって、フロアスタンドなどを使って照明の位置も低くなっているの、心地よさからついつい長居してしまいがち。気合カフェもいいけれど、やっぱり落ち着くヨーロッパホームスタイル風リラックスカフェが、東京にももう少し増えてもいいのではないのでしょうか？

(田沼 彩子)

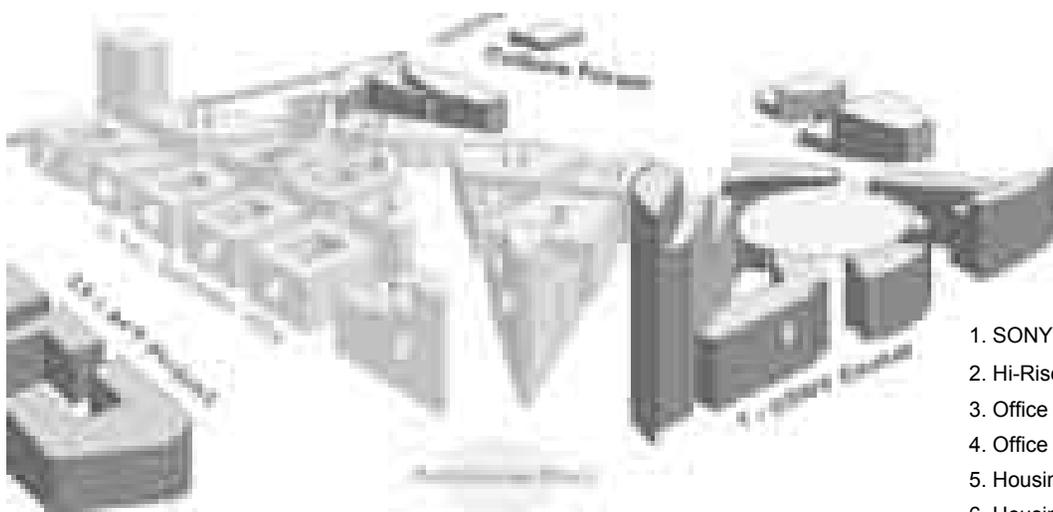


東京のオシャレなカフェ



都会の一角の古いマンションで隠れ家的カフェを発見

建築見本市 in ポツダム広場！



街を歩いていて一際目を引くのがポツダム広場を中心とした再開発地区。

ソニーセンター、ダイムラークライスラーなどなど、世界の著名な建築家の建物がずらりと軒を連ねて、さながら未来都市の建築見本市といった様子です。

建築マップ片手にめぐってみてはいかが？！

1. SONY CENTER / Helmut Jahn
2. Hi-Rise Tower / Hans Kollhoff
3. Office / Renzo Piano
4. Office / Richard Rogers
5. Housing / Richard Rogers
6. Housing / U. Lauber + W. Wöhr
7. Volksbank Headquarters / Arata Isozaki
8. Residential Hotel / U. Lauber + W. Wöhr
9. Housing / Renzo Piano
10. IMAX Theater / Renzo Piano
11. DEBIS Headquarters / Renzo Piano
12. Office / Rafael Moneo
13. Hotel Grand Hyatt / Rafael Moneo
14. Musical Theater + Casubi / Renzo Piano

“ 2002 Light + Building ”フランクフルトメッセレポート

Frankfurt, Germany 2002/04/15-19

イタリアで開催される照明器具見本市、ユーロ・ルーチェとインテルはヨーロッパのなかでは多少イタリアンローカルな色が濃い、フランクフルトで毎年開催される、この照明・建材展は規模、出展者数ともにこちらの方が大きい。

ドイツは日本でも照明設計者にはなじみの深い、ERCO 社や BEGA 社を有する国でもある。もちろん先のルーチェやインテルへの参加企業も、ほとんどがこの展示会には参加している。欧州照明事情を知るための唯一最大のイベントである。

■アウトドア・スタンダード

今回のエポックは ERCO 社のアウトドアシリーズの発表であろう。ERCO 社そのものは昨年にこれらをすでに発表しており、むしろ興味深いのは追従する他のメーカーの動向である。

ERCO 社は高品質なスポットライトと洗練されたトラックシステム、またダウンライトで知られるメーカーである。ヨーロッパ各地の有名美術館などで採用されている照明界のリーディングカンパニーなのだ。永らく屋外用の照明器具には手を出さなかった ERCO が満を持して発表したものは少なからず他社に影響を与えているはずだ。屋内のエルコに対して双壁をなす、屋外の BEGA 社だが、品質の高さは主に耐久性にあり、形態のバリエーションこそ多いが、配光のそれに乏しく質も高いとはいえない。ERCO 社が屋内照明で培った光の質を屋外に持ち出せば、それらは自ずから屋外照明のスタンダードとなるに違いないからだ。

昨年発表の今年であるから、本当の影響はまだ現れてはいないと思われるが、散見された状況を報告する。

投光器は配光の質に加えて、レンズ・フィルター・ルーバーなどのアタッチメントシステム、それと小型 HID ランプ全盛の今は安定器を収納する取り付けベースのシステム整備が必須であるが、その点において競合は We-ef 社であろう。We-ef 社は創業 50 年で、じつは投光器システムの開発・販売は ERCO 社に先駆けている。製品ラインナップも ERCO 社より多い。一部製品は日本でも輸入・販売されている。

一方、イタリアの iGuzzini 社が今年、ERCO の対抗製品ともいえる Woody シリーズを発表した。ColorWoody (マルチカラーチェンジャー内蔵型) などをはじめとして、多様な展開を見せているが、むしろ目を引いたのは、直管型蛍光灯を用いた Lenealuca というシリーズだ。

iGuzzini 社と対抗する、同じイタリアの TARGETTI 社の今後の動向が気になるところ。

■新光源 LED

LED (高輝度発光ダイオード) そのものは珍しくも何ともないものだが、現在世界的に照明業界が注目し、開発競争を繰り広げている。このメッセでもたくさんのメーカーが応用製品を発表していた。しかし応用といっても、その絶対光量の少なさから「照らすための照明」ではなく「見せるための照明」器具が多い。つまりインジケータライトなどである。ERCO 社でさえもこれを製品群に加えている。(ERCO 社はオリエンテーションライトと呼んでいる。) 同じ「でさえも」は PH ランプで知られる louis poulsen 社にもあてはまる。さすがに louis poulsen 社には独自の解釈を求めたいところだが、どのメーカーをとっても開発アプローチは似たり寄ったりである。むしろランプメーカーの OSRAM 社が LED を照明用光源としてユニット化したことの方がインパクトが大きい。

■インターネット

われわれ照明デザイナーにとって、海外の見本市での重要な仕事の一つはカタログ収集であった。紙のカタログは、パソコンの普及で CD-ROM になるか? などと思っているうちにあれよあれよという間に、その

媒体をインターネットに移してしまった。もちろん紙も CD もある。展示会場でこれらを直接受け取ることはなくなって久しいが(後日、送られてくる。)紙と CD のどちらもまだ同じように供給されている。しかししたいのメーカーは Web 上の情報アップデートの方が早いし、充実もしている。紙や CD などの物質媒体の存在意義は日に日に薄れていくだろう。

書籍一般の価値も情報媒体から、一種の工芸品の価値へと移行すると言われているが、ベルギーの新進メーカー Modular の紙カタログがおもしろい。内容や装丁がカタログと言うよりも写真集や画集のそれに近いからだ。

最近になって、コンピュータの 3D ソフトウェアでは有名な 3Dstudio というやつがバージョンアップし、同じく 3DCG と照明解析ソフトで有名な LightScap を機能の一部として取り込んだ。先の ERCO 社は Web サイト上の製品アイコンを、この 3Dstudio のモデリングウィンドウをドラッグ&ドロップすると器具の 3D モデルデータと配光データがいっぺんに取り込まれるという機能(というよりはサービス)を大々的にデモンストレーションしていた。

ハノーバーメッセから分離してもなお広大で 1 日や 2 日で回りきれない印象のフランクフルトだが、個々のメーカーのプロダクトよりも、通貨統合による照明業界への影響が今後は興味深いと思われる。インターネットによる情報流通の均質化との両輪で、欧州の照明業界人は今よりもっと忙しくなるのだろう。

(澤田 隆一)

1. ERCO のアウトドアシリーズ
2. BEGA の展示ブース



面出の探偵ノート

●第29号 2002年7月1日(月)

ワールドカップ最終戦観戦記

5月末に北京大学の招きで建築家の原広司さんと一緒に「光会」というテーマの講演をしてきました。2泊3日の忙しい日程でしたが、原さんは「光的形態」(本当は様相としたかったのですが、様相は中国語にない…とか言われて仕方なく)というテーマ、私は例のごとく「21世紀の都市環境照明」というお決まりテーマでの講演でした。この珍道中もなかなか面白かったのですが、探偵ノートにはこの「北京物語」をレポートするつもりでいきましたが、いつものように締切ぎりぎりになってしまっ、今となると昨夜の横浜スタジアム、ワールドカップ最終戦のほうが旬になってしまいました。今回は「北京物語」を先送りして、昨夜の興奮を語りしたいと思います。最終戦、思いつくままに…。

どうして私なんかに貴重なワールドカップの最終戦チケットが手に入ったのかは未だ謎ですが、とあるオフィシャルスポンサーの招きでありました。照明デザイナーの近田玲子さんと二人だけで盛り上がっていた感じなのですが、実はその他の招待者は殆どが会社のお偉いさんたちで、照明業界の社長さん連を除いては殆ど知る由もないご一行です。まずは日の出棧橋に2時半集合。豪華クルーズ船を借り切った飲み食い前哨戦で、横浜大棧橋に着いてからバスに分乗して横浜スタジアムに入ったのが6時少し過ぎ。私の席はUS\$750(9万円)とチケットに印刷された[E12, 10列268]という良い席でした。メインスタンドの反対側で、貴賓席と対峙した場所です。両方のゴールが同じように見ることができて選手にも近く迫力満点の席なのですが、いつもTVカメラの角度で観戦しているので最初は少し違和感がありました。フィールドも思いのほか狭く感じたし、選手の動きを追う視線には必ず全方向からの投光照明のグレアが入ってくるし、選手がゴール前に固まるとどれが誰の足なんだか分からなくなるし、霧雨はかかってくるし。低い位置からの視線がいかにTV視線と違った感動と不便さの両方を伴うものかを実感しました。そして更に発見したのは競技場では「誰も試合を解説してくれない」ということです。慣れた人は携帯ラジオを耳にして実況解説つきで楽しん

でいました。なるほど頭良い。私が最も興味を持って観戦したのはボールを追わない人たち。ドイツに攻め込まれている時のロナウドなんて、とんでもなく暇そうに休んでいる様子です。フォワードとはそういう仕事なのだと感心しました。しかし、味方がブラジル陣深くに攻め入っている時でさえ、ドイツのキーパーカーンの目の鋭いことといたらない。これはロナウドとカーンの性格の違いもありそうですね。

その他の普通TVカメラに映りにくい状況と言えば、報道カメラマンたちの熾烈なポジション争い。こと表彰式や会場パフォーマンスになると、何十人もの望遠カメラを抱えたカメラマンたちが、われこそ最高の場所確保とばかり、押し合いへしあいしながら撮影ポジションを争うのです。これまたプロだなあ、と思わせる場面でした。それと滑稽だったのは貴賓席に鎮座した方たちの態度。私はもっぱら双眼鏡で観戦している人たちの表情を観察したのですが、貴賓席では皇后陛下のみが隣の解説者に質問したり、天皇陛下に話し掛けたり、時々は笑みを浮かべたりして体の動きがあるのですが、天皇はもちろん、その隣の金大中ご夫妻などは何処が面白くないのか終始微動だにせずの観戦。お調子者の小泉さんなどはさぞ派手に騒いでいるのではと思いきや、金大中さんに付き合っか、これもまたお静かに…。なんとも貴賓席というところは地獄だなと思いました。つまり軽率に喜んで手叩いたりしてはいけないルールになっているのだと推測しました。片方のチームや国を応援することが許されていないのだと。

双眼鏡がとても役立ちました。競技場には試合をする人だけでなく、報道や警備などの厳しい仕事をする人、スムーズな進行に気を配る運営関係者、そして試合の始まる2時間も前から熱狂的に体をくねらせるサポーター、くねらせたい体をじっと我慢して役目を終える人…。色々な詳細表情がありました。

さて照明探偵らしく最終戦の光環境に触れなければなりませんね。ちょっと興奮していて照明どころではなかったのですが、隣で同じように興奮している近田さんも「ちょっとこのグレアがひどいね！」

というのが競技場照明の全てを語っています。そもそも私たちは照明デザインのプロなので、グレアをことさら敏感に感じたりする傾向もあるのですが、私などは持参したキャップのつばを深く下げて2階席上部の投光器の存在を視野から消して観戦していました。そうすると本当に見やすくなるのです。野球の選手はナイトゲームでも帽子をかぶっているのに、サッカー選手はどうして帽子をかぶらないのか???,と不思議に思いましたが、それではヘディングもできませんものね。直ぐに気が付きました。多分サッカー選手はずいぶんグレアに苛まれているはず。それだけ鉛直面照度をとることとグレアをなくすこととは両立しづらい矛盾する要求なのでしょう。

最後に色々行われたイベントやアトラクションの感想。思い返してみると色々な隠し芸が披露されました。最初に和太鼓、そしてお神輿、参加国の国旗、ユニセフの子供憲章、唱歌、富士山、千羽鶴の雨…、こんなところですか。どれもこれも私には当たり前メニューでセンスに欠けるものだなあ、というのが実感ですが、最後の千羽鶴が止め処もなく空から降ってくるのがちょっと面白かったです。もともと折り紙が空からくるくる回って舞い降りてくるような光景は普通では見られません。スタジアム2階席の先端に用意された大きな布の袋みたいなものを、ユサユサ揺すっているように見えたのですが、暗い夜空を背景に投光器に照らされた折鶴が体を回転させながらキラキラと舞い降りる瞬間は、雪の結晶のようでもあり、すべてを終了したワールドカップへの労いのようなでもあり、しばし目を奪われるような印象的な場面でした。とはいえ数百万羽に及ぶ夢の折鶴は、最終的に退場者に踏みしだかれて落ち葉のように、捨てるものもないほどでしたが…。競技場をバスがでて品川へ戻り着いたのが12時ごろ。私にとっての夢の最終戦はとても短く多少あっけなく過ぎ去りました。やはり競技場では照明探偵ごっこなどしてはだめですね。ひたすらゲームにのめり込まなければ。何をやっても少し覚めたところがあるのは私の悪い癖です。少し反省の観戦記でした。

(面出薫)